

# 東南アジア・サッカーリーグにおけるアフリカ出身選手の適応戦略

大谷大学 阿部利洋

## 1 目的

移民選手をテーマとするサッカーの社会学的研究は、これまで欧州リーグを対象として行われることが多く、そこでの議論は、アフリカや中南米といった選手供給地域との経済格差を前提とした上で、選手の搾取や「(頭脳流出をもちいた)筋肉流出」に見られる新植民地的状況を批判的に捉える傾向があった。一方で、アジア等新興地域における動向は欧州とは異なるパターンを持つのではないかと考える研究も現れている (Elliott and Harris 2015)。本報告もそうした関心から、東南アジアのリーグで活動するアフリカ人移民選手に着目し、彼らがどのような環境のなかで、どのような適応戦略を展開しているのか、実証的に明らかにすることを目的とする。

## 2 方法

タイ・カンボジア・ベトナムで、現地クラブに所属するアフリカ出身選手および関係者に対する聞き取りを通じて、彼らが当該地域を選んだ動機・経緯、移住後に明らかになった就労環境やリスク、また選手登録後の問題・戦略、アフリカ人同士のインフォーマルな協力・コミュニティ等を理解しようと試みた (2014年から2019年にかけて計12回)。トライアウトのために滞在している者も含めれば、当該地域で年間1000人以上と言われるアフリカ出身選手の全体像を捉えることは難しいものの、各選手の話には共通する部分もあり、ある程度の傾向を把握することも可能なものと思われる。

## 3 結果

対象とした地域のリーグでは、彼らに対する幾分ステレオタイプに沿ったイメージも出来上がっている。しかし、基本的に単年度契約の選手たちは、(実態とは異なっても)そのイメージを利用することで移籍交渉をスムーズに運ぼうとする。また、彼らは異なるクラブに所属するアフリカ人ネットワークのなかでインフォーマルなトレーニングを繰り返し、ローカル選手とは異なるゲーム感覚を共有すると同時に、次の移籍交渉時に「別クラブで自分と組むことのできる選手」との連携も図っている。他方、移籍シーズンへ向けては近隣諸国のクラブを併せて移籍情報をやり取りしている。こうした実態は、新興リーグに見られる(変化が速く、またルースな)就労条件のなかで模索される能動性であり、当該地域におけるスポーツ移民の特徴・動向を理解するための質的データを提供している。

## 4 結論

東南アジア新興リーグに特徴的な環境のなかで、アフリカ出身選手は独特の適応戦略をもって一定のプレゼンスを維持している。それは欧州を中心に論じられてきたアフリカ出身選手に対する先行研究の多くに共通する批判的な視角とは異なる形で移民選手の実態を理解する必要性を示している。

## 文献

Elliott, R. and J. Harris, 2015, "Conclusion: Playing the Long-Ball Game: Future Directions in the Study of Football and Migration," R. Elliott and H. Harris eds., *Football and Migration: Perspectives, Places, Players*, London: Routledge.